

1 1. 管内肉用鶏 2 農場で発生した脚弱事例

玖珠家畜保健衛生所・1) 大分家畜保健衛生所・2) 豊後大野家畜保健衛生所
○汐月貴紀・(病鑑) 人見徹・(病鑑) 足立高士
病鑑 大木万由子¹⁾・病鑑 梅田麻美¹⁾・長島尚史²⁾

【はじめに】管内の肉用鶏 2 農場で相次いで脚弱事例が発生し、病性鑑定で脊椎疾患等が確認されたため、その概要を報告。

【農場概要】農場 A、B は系列農場で、A は 67,000 羽、B は 135,000 羽の肉用鶏をそれぞれ飼養。いずれの農場も平飼開放鶏舎で、敷料は戻し堆肥を使用。

【材料及び方法】農場 A、B の淘汰予定の脚弱鶏を用いて病性鑑定 (A : ①、②、B : ③、④、⑤) を実施。① : 2023 年 8 月、48 日齢 (5 羽)、② : 2024 年 1 月、36, 38 日齢 (5 羽)、③ : 2023 年 9 月、30 日齢 (1 羽)、④ : 2023 年 10 月、42 日齢 (1 羽)、⑤ : 2024 年 2 月、15, 17 日齢 (5 羽) を材料に供試。ウイルス検査は AIV, NDV, IBV, CAV, FAV, IBDV, AEV について定法に従い実施。細菌検査は主要臓器、脳、脊椎スワブ、血液を用いて分離培養後、菌種同定、薬剤感受性、パルスフィールドゲル電気泳動 (以下 PFGE) を実施。病理組織検査は主要臓器、脳、脊椎等を用いて HE 染色、グラム染色を実施。

【検査成績】病理解剖では①、②、③、④で第 6 胸椎部の膨隆を確認。細菌学的検査では、②の 1 羽及び④の脊椎膨隆部から *Enterococcus cecorum* (以下 EC)、③の脊椎膨隆部から大腸菌及び *Staphylococcus lentus* (以下 *S. lentus*)、⑤の 1 羽の主要臓器及び血液から EC を分離。薬剤感受性試験では、②、④、⑤由来 EC は同様の傾向を示し、アンピシリン及びアモキシシリンに感受性であった。②、④、⑤由来 EC の PFGE の結果、④と⑤は同一、②は④、⑤と異なる泳動パターンを示した。病理組織学的検査では、① (4/5 羽)、③、④の第 6 胸椎で化膿性炎、② (1/5 羽) 及び⑤ (2/5 羽) で第 6 胸椎の変位がみられ、病変部脊髄の扁平化、粗しょう化及び軸索膨化を確認。脊椎病変部では③でグラム陽性球菌及び陰性菌、④でグラム陽性球菌を確認。⑤で敗血症の所見は認められなかった。ウイルス学的検査は脚弱に関連するものはすべて陰性。以上の結果から、① : 化膿性脊椎炎 (4/5 羽)、② : 脊椎すべり症 (1/5 羽)、③ : 大腸菌及び *S. lentus* による化膿性脊椎炎、④ : EC による化膿性脊椎炎、⑤ : EC による菌血症疑い (1/5 羽)、脊椎すべり症 (2/5 羽) と診断。

【考察】PFGE の結果、農場 A、B 由来 EC の両者に疫学的な関連は示唆されなかったが、農場 B の異なる鶏舎由来 EC は同一パターンを示したことから、農場内で水平伝播が起こっている可能性が示唆された。追跡検査では、農場 A では *Enterococcus* 属菌、ブドウ球菌及び大腸菌、農場 B では *Enterococcus* 属菌及び大腸菌が分離され、両農場で *Enterococcus faecalis* による化膿性脊椎炎の発生がみられたことから、分離菌ごとに対策を行う必要性が考えられた。

【まとめ】今回、大分県で初めて化膿性脊椎炎の発生を確認。農場では飼養衛生管理基準の遵守、オールアウト後の鶏舎内洗浄消毒の徹底に加え、予防的な有効薬剤投与により淘汰鶏は減少傾向にあるが、薬剤耐性菌の発生が懸念されることから、モニタリングを継続中である。今後 EC の病原性など、追加検査も行っていきたい。